もくじ

はじめに……2

Chapter 1　崩壊させない学級づくり

1　大切にしたい学級開きの一週間……12

（1）話を聞く姿勢に注目する……14

（2）指示を出しっぱなしにしない……15

（3）子どものこんな行動は危険信号！……16

（4）子どもも教師も言葉遣いを大切に……26

（5）当番の仕事は公平に……28

## 2

「ほめる力」と「正しく叱る力」……30

（1）基本はほめること……30

（2）教師にとって大切なのは「正しく叱る力」……31

（3）付和雷同型の子どもには特に注意……34

## 3

子どものありのままを受け入れる……37

（1）子どもに対してレッテルを貼らない……37

（2）「真面目にコツコツと取り組む子ども」と「要領がよい子ども」……39

（3）子どもに理想を求めすぎない……41

（4）反抗は子どもの心の裏返し……43

## 4

居心地のよい学級にするために……44

（1）子どもに要求したことは、教師も必ず守る……44

（2）子どもと遊ぶ時間をつくろう……45

（3）どの子どもも活躍できる場面をつくる……46
（4）時々静かな時間をつくる……47
（5）子どもにおもねらない……48
（6）真面目な子どもが損をしないように……49
（7）ＩＣＴ機器を活用しよう……51
（8）どうしても落ち着けない子には……52

## Chapter 2　振り回されない保護者対応

1　保護者は教師の味方？……56
（1）全員が味方でなくてもいい……56
（2）保護者の信頼を得る方法……60

2 大切なのは「伝え方」……64
（1）まずは子ども自身が親に伝える……64
（2）子どもの問題行動を伝える時は……66
3 火は小さい内に消す……69
（1）予防策は徹底的に……69
（2）隠さずに協力要請……73
4 範囲外のことには手を出さない……79
5 苦手なタイプの保護者でも……79
6 主張の強い保護者に振り回されない……83
（1）クレームと決めつけずに話を聞く……84

（2）多数派の意見かどうか判断する……84
（3）自己本位な意見を退けるコツ……85
7 トラブル回避のために記録を残す……86

## Chapter 3 こじらせない教師間トラブル

1 新しい職場での関係づくり……90
（1）出る杭は打たれる？……91
（2）習慣になってしまう前に……94
2 こんなに違う！管理職の対応……96
3 苦しい時は誰かに話そう……101

4 もしパワハラにあったら……104
（1）相手が同僚の教職員である場合……105
（2）相手が管理職である場合……109

Chapter 4

# 自分を責めない思考回路

1 自分自身を救う考え方……114
（1）すべてを自分のせいにしない―責任は半分のすすめ―……116
（2）自分の中だけで答えを探さない……121
（3）他人は自分の思い通りにならなくて当たり前……123
（4）己を知り、理想を求めない……124

（5）言葉を心の支えにする……125
（6）仕事に依存しすぎない……127

## 2 自分で自分を守る時代……128

（1）トラブルに備える……128
（2）「休む」準備をする……134

おわりに……140

付録　保護者の信頼を得る学級通信文例20……142

一緒に遊ぶ時間をつくりたいものです。

もちろん、子どもの中には、休み時間は一人で過ごしたいという子もいるでしょう。その気持ちは尊重し、無理に遊びに誘うようなことはしません。

## （3）どの子どもも活躍できる場面をつくる

学校の目標はたくさんありますが、なんと言っても「学校は勉強するところ」です。ところが、その勉強が苦手な子どもにとっては、学年が上がるにつれて学校が居心地の悪いところになっていきます。勉強が面白くない子どもの中には、退屈するだけではなく、時には授業妨害をする子どもも出てきます。

私は常に、勉強の苦手な子どもを活躍させる場を考えていました。例えば、体育が得意な子どもなら、体育での見本はいつもその子にさせました。図工でアイデアを出す子どもがいたら、どうやって思いつ

いたか、みんなの前で話をさせました。

国語の授業で、ある子どもがとても突飛なことを言い出して、授業が大変盛り上がったことがありました。その子の意見は話の本筋からずれていたのですが、本人は決して引きません。子どもたちはその子を納得させようと、あの手この手と頭をひねって考えました。授業の終わりに、子どもたちは「先生、今日の授業は面白かったね」と言いました。私はすかさず、「どうして今日の授業は面白くなったのだと思う?」と聞きました。すると、「そうだ、Aさんがあんなことを言い出したからだ」と答えました。私は、「Aさんの意見は突飛だったけれども、それで授業がとても楽しくなったね。Aさんのおかげだな」と言って、大笑いになったことがありました。本人は照れ笑いをしながらも、満足そうでした。

## (4) 時々静かな時間をつくる

授業でも、「はい」「はい」と意見がよく出る授業は、活発でよいとされがちです。発表したい子どもは、元気いっぱいで手を挙げます。

しかし、私は時々わざと静かにさせることがあります。クラスの雰囲気が浮ついている

時に「ちょっと静かにしてみようか」と言って、しばらく無言にさせます。また、発表は多いのに意見が上滑りだと感じる時は、「今は真剣に考える時だ」と言って発表を遮り、時間を取って考えさせるようにします。

今の子どもたちは、朝から晩まで音に囲まれています。テレビの音、ゲーム機の音、YouTubeなどの音、ひょっとすると教師の声もそれら雑音の中の一つくらいとしか思っていないかもしれません。時々は無音の状態をつくり、静かに考える時間をつくると、子どもの心を安定させることができます。

## （5）子どもにおもねらない

特に高学年の場合ですが、影響力の強い子どもの意見に教師が振り回されることがあります。

Bさん「先生、ちょっと宿題多くない？　減らしてよ」

教　師「仕方ないなあ。今回だけだよ」

Bさん「やった！」

子ども「ありがとう！　Bさん」

こんな場面もあるかもしれません。Bさんのような子どもの機嫌を取ると、クラスがうまく回ることがあります。中には、影響力のある子どもを利用して、学級経営をする教師もいます。この指導方法は、時には有効なこともありますが、常套手段として使うと学級にカーストをつくることになります。結果として、力のない子どもがクラスの端に追いやられたり、段々と担任の言うことを軽視するようになったりして、最後は学級経営がうまくいかなくなるのです。

## (6) 真面目な子どもが損をしないように

掃除や当番の指導にも通じるのですが、「真面目な子どもに損をさせない」ことや「ずるが通らないようにする」ことは、学級経営の上で重要な要素です。ずるいことをする子どもが得をするようでは、真面目な子どもがやる気をなくしてしまい、学級全体が崩れてきます。

少し崩れかけた学級がありました。男子は給食の時にエプロンに着替えることもしません。掃除もきちんとしません。女子は、きちんとしたクラスにしたくて、そのことに不満を募らせていました。

## 5　苦手なタイプの保護者でも

苦手なタイプというのは、誰にでもあるものです。教師も人間ですから、例外ではありません。苦手なタイプの保護者と接することは、心理的負担も大きいでしょう。近寄りがたかったり、あまり関わりたくなかったりして、少し距離を取ってしまうものです。しかし、ちょっとしたことで、その考えが大きく変わる瞬間があります。こんなことがありました。

4月、私はある女の子を担任することになりました。いろいろと問題を起こす兄がいました。学校に呼び出された時の母親の様子を見ていると、なかなかの人物で、「あのお母さんか、気をつけないと」と正直思いました。ところが、妹は大人しくて優しく、とても問題を起こすような子ではなかったので、安心していました。

夏休み前に足の手術をするというので、一か月ほど学校を休みました。病院にお見舞いに行きましたが、親子共々うれしそうに迎えてくれました。7月の夏休みに入ってすぐ、私の学校では保護者との懇談会があります。そこで、そのお母さんから思いも寄らぬことを聞きました。

「先生、1学期にしたはずのテストとプリントが全部ないのだけど」

確認すると、ちょうど休んでいた時のテストやプリントはやってありません。私は、「退院してすぐに夏休みに入ったので、休んだところは勉強していません。秋にそこを勉強してから、プリントやテストをするつもりです」と答えましたが、不思議に思って尋ねました。

「しかし、よく気づかれましたね。一つ一つ確認しているのですか？」

私は、正直言って、そのようなことをきちんとするお母さんとは思っていませんでした。するとお母さんは自分の生い立ちを含め、ポツリポツリと話し始めました。

親とは縁遠く「家庭」というものを知らないこと、自分の小さい時の写真、学校の作品、絵やテストなどはほとんど残っていないこと、せめて自分の子どもには、きちんと残してあげたくて整理して保管していること。それを聞いて、私は恥じ入りました。

また、それまでそのお母さんに感じていた壁のようなものが、消えていくのを感じました。思わず「お母さん偉いですね。子どものために、そんなにきちんとしている人はほとんどいませんよ」と言いました。

それ以後、そのお母さんへの見方が変わりました。確かに常識から外れた行動はありましたが、それは経験のないお母さんにとって、考えた末の精一杯の行動だと思えるようになったのです。

また、こんなエピソードもあります。

ベテランの女性教師が担任している学級には、乱暴な行動も多く指導に困っている子どもがいました。保護者には、問題を起こすたびに連絡しているのですが、「うちの子どもだけが悪いわけではない」の一点張りでした。しかし、あまりの行動に、両親を学校に呼び出しました。呼び出されたことがいかにも不満らしく、見るからに不機嫌な様子で学校

に来ました。こちらの話を最後まで聞かないうちに、学校や担任への不満が、罵詈雑言とも言える調子で返ってきます。結局、両親の話を聞くだけで面談は終了。しかし、帰り際に母親が「私たちも困っているんや」とポツリと言いました。それを聞いて、担任はハッとしたそうです。学校や担任への攻撃は、自分たちを守るためだったのだと。子どもの行動を何とかしなければならないことは、保護者も十分に分かっていたのです。

それ以後も保護者の口調は相変わらずでしたが、以前感じていたような心理的な圧迫は減ったと担任は話していました。

学校や担任に対して攻撃的な保護者には、つい距離を取りたくなりますが、心の底がふと垣間見られる瞬間があります。先入観でがんじがらめになっていると、この瞬間を見逃してしまうかもしれません。

## 6　主張の強い保護者に振り回されない

絶えず苦情を言ってくるような強力な保護者もいるものです。先入観をもたず真摯に対

た。

管理職も初めて聞いたらしく、「本当に必要なのか」とみんなに聞きました。そして、「子どもが消毒液の原液を扱うのは好ましくない、さらに費用をかける必要性を感じない。明日からやめよう」と言ってくれました。判断のできる管理職です。

「人間は習慣の奴隷」という言葉があります。習慣になってしまうと、そこから抜け出すのはなかなか難しいという意味です。本当に必要かどうかという疑問すら抱かなくなってしまうケースが多いのです。

## 2　こんなに違う！　管理職の対応

誰もが頼りになる管理職を求めます。残念ながら、そうでない場合があるのも事実です。

では、どうしたらよいのでしょうか。逆に、こんな素晴らしい管理職もいるのかと知っておくと、対策が打てます。私が経験した、管理職の対照的な対応例を挙げてみます。

## A校での例

対応の難しい保護者のいるクラスの担任を、校長から頼まれました。子どもが少し不安定なので、トラブルが起きることがあります。それまでの担任は保護者に攻められて、悩んだり体調を崩したりしていたという経緯があります。

4月、新学期が始まる前に、管理職は私に対して、次の対応を提案しました。

・子どもがいつトラブルを起こしても対応できるように、私は児童の登校から下校まで教室にいて見守っている。（私は、その子が運動場に行った場合も、できるだけ教室や職員室から窓越しに見ていました）
・そのため、朝の打ち合わせは出なくてよい。他の教師が輪番でメモを私の机の上に置く。
・校務分掌での担当は一切なし。学級経営に専念する。
・授業の空き時間の教師は、職員室で仕事をしながら待機する。教室から私がインターホ

ンで援助を求めた時は、援助に駆けつける。

・この子どもを担任したことがあり、かつ保護者の信頼が厚い教師を隣のクラスの担任にする。

さらに、春休み中に、この子どもの情報や保護者対応の注意点を、今までの担任からしっかりと引き継ぎました。最初は緊張しましたが、校長が「何か困っていることはないか」と絶えず聞いてくれました。小さなトラブルはありましたが、大きな問題なく一年を過ごせました。何より「みんなが支えてくれる」という安心感が大きかったように思います。

## B校での例

学校の異動が決まりました。3月末に、次のB校の校長から「6年生をお願いしたい」という連絡がありました。私はすぐに「おかしい」と思いました。新しい学校も地域も分からない私が、いきなり6年生です。知り合いに聞いたら、問題の多い学年と聞きました。一旦は「子どもたちも地域の様子も分からないので、できれば他の学年をお願いしたい」と返事しましたが、「あなたならできる」の一点張りで、6年の担任を任されました。

4月に赴任しましたが、連絡をくれた前任の校長は3月に退職していました。職員会で新校長から「6年○組をお願いします」と言われた時に、それまでうつむいていた職員の何人かが顔を上げ、私を見たのが忘れられません。職員の顔ぶれを見たら、私でなくても担任できる力量のある教師はいました。私は、なんとなく「担任を押しつけられた」と思いました。後から思えばこの考えが私を救ったのです。

担任発表の後は、校務分掌や時間割の話し合いですが、機械的に割り振られていきました。A校のような、難しいクラスを担任することに対する配慮は一切ありませんでした。

子どもたちが大人しくしていたのは最初の一週間くらいで、その後は問題行動の連続でした。しだいに、叱ってばかりいる私と子どもたちとの歯車がかみ合わなくなって疲れてしまい、毎日、学校に行くのが苦痛になりました。この時期は、「無理だったら休んでしまおう」と本気で考えました。新校長は「なぜ君がこのクラスの担任なのか?」と聞いてくださり、同情してくれましたが、後の祭りです。

学校の状況により一概には言えませんが、新しい学校で、自分の他に適任者がいないのならともかく、いきなり6年生を任されるのは要注意です。6年生にとっては、自分たち

・子どもたちの一番の理解者は自分であると自信をもつこと。
・現状を話して、どうしたら少しでもよい方向に行くのか、まず自分から具体的方策を周囲に提案し、みんなにも考えてもらうこと。
・その方策に誰かの助けが必要な時は遠慮せずに頼むこと。困った時に協力し合うのは当然のことだと考え、卑屈になることなく頼むこと。
・子どもたちのために協力してもらうのであって、学校全体の仕事である。個人の仕事を他の人に手伝ってもらうのではないのだから、協力を頼んでも恥ずかしいと思わないこと。

また、手助けを頼む時は、個人ではなく組織として動いてもらう必要があります。「心配だ。手助けしたい」と思ってくれる同僚がいても、自分の仕事もあるし、どう動いていいか分からないでしょう。組織的に方策を組めば、仕事として動くことができ

ます。

管理職に「組織として動いてほしい」と要請し、管理職中心に動いてもらうことです。それが管理職の仕事なので、ためらわずに頼りましょう。担任の力不足で自分の仕事ではないと考えるような人物なら、その程度の力しかない管理職だということです。適任でない者を担任にしたことから、最後には管理能力不足と言われることになるでしょう。

## (3) 他人は自分の思い通りにならなくて当たり前

子どもや保護者に対して、自分の考えが伝わらなかったり、受け入れてもらえなかったりする時にはどうしてもイラッときてしまうこともあるでしょう。それは、教師の責任感や使命感の裏返しとも言えますが、その考えを取り払うように努めましょう。たとえ完全には無理でも、自分がコントロールできないことには、あまり執着しない方が精神的に楽なのです。

「人は思い通りにならないもの」と考えましょう。また、それは事実です。

イギリスのことわざに「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」というものがあります。どうも日本の教師は、子どもたちを水辺に連れて行って、

## 例13　キタキツネの子別れの儀式

北海道に生息するキタキツネ。可愛い顔で癒やされますね。意外な面を二つ紹介します。一つはエキノコックスという怖い寄生虫を持っています。北海道在住の人は、キツネには絶対触りません。もう一つは、子別れの儀式です。このキタキツネ、子どもが生まれるとお母さんキツネは甲斐甲斐しく育てるのですが、子別れをしなければならない時が来ます。動物の多くは親が狩りの訓練を子どもにさせて、自分で生活できるように育てた後、徐々に始まりますが、キタキツネの場合はある日突然来ます。子ギツネがいつものように、お母さんに甘えに行くと、母ギツネは怖い顔をして子ギツネに向かいます。さらに近寄ろうとすると、歯をむき出しにして威嚇します。それでも子ギツネが近寄って行くと本当に噛むのです。わけの分からない子ギツネは戸惑い、何度も近寄ろうとしますが、母ギツネは引っ掻いたり、噛みついたりします。仕方なく子ギツネは、母ギツネと距離を取り始めます。何度も何度も母ギツネを振り返りながら、離れていく子ギツネを見ていると涙が出てきます。そうしてキタキツネの子別れの儀式が終わります。

なぜ、子別れをしなければならないかというと厳しい北海道の自然が影響しているそうです。母ギツネは自分の餌を見つけるだけでも大変なのです。大きくなってくる子キツネと自分の餌、2匹分は難しいのです。子別れした子ギツネも、約4割しか育たないと言われています。

さて、このキタキツネに憧れて、いつか同じように子別れしたいと思っていたお母さんがいました。問題は、いつ子別れするか。キツネと同じ年では、当然人間は無理。小学校、中学校でも無理。しかし、ついにその日が来ました。長男が高校を卒業して一人暮らしをすることになりました。引っ越しのその日、「じゃあ、行くわ」と言った息子をお母さんは抱きしめて、首根っこを軽く噛みました（笑）その子は驚いたのですが、日頃からお母さんは「いつかキタキツネのような子別れをするからね」と子どもたちに話していたのでそのことかと思い、笑いながら去って行ったそうです。